

伊吹はルシファアのエスコートでカジノのVIPルームに入ると、ソファアに腰を下ろし運ばれてきたデモナスを一口飲んでからため息をついた。

「どうした？カジノの中で疲れたのか？」

ルシファアの自分を気遣う言葉に首を横に振ると、伊吹はルシファアの肩にもたれかかった。

「違う。ここに来るとなんとなくほっとするだけ」

「そうか」

ルシファアの腕が伊吹の肩に回され、そっと抱き寄せたと同時にひたいにキスが落ちる。

あいさつ程度の軽いキスだったが、伊吹はなんとなく自分がルシファアから労わられているという気がした。

「ルシファアはここに来るとほっとするって言うのはないの？」

「俺か？俺は特別そう言うのを気にしたことはない」

「・・・そうなんだ。なんでだろう？私まだこういう所に慣れていないのかな？」

「そうかもしれないな。確か人間界では大学生なんだよな？」

「うん。本当に平凡でどこにでもいる大学生だった」

「人間界では今までどんな所に行っていたんだ？」

「んー・・・カジュアルなお店が多かったかな？地獄亭みたいな所とか、カフェが凄く多かったかも」

「・・・なるほど、確かにカジュアルな店ばかりだな。カジノに行ったことはあるのか？」

「んー、ちょっとゲーム感覚で楽しめる場所なら何回行ったことがあるけど、こう言う高級カジノには行ったことがないかな？」

「なるほど」

「だって今までカジノ行くのにドレスコードを気にしなきゃいけませんとかなかったもん！本当にびっくり！」

そう言って伊吹は改めてデモナスを一口飲んだ。

「ルシファアはこう言う場所慣れているの？」

「ああ。俺はもうずいぶん長くここに通っているからな」

「良いなー。私もそんな風になりたい」

伊吹はデモナスの入っているグラスをテーブルに置くと靴を脱いでルシファアのひざの上に頭を置いた。

伊吹が横になっても十分な幅のあるソファアはとても大きく、ソファアというよりはベッドという方に近かった。

「おや？ルシファアも来ていたのかい？」

声がした方に顔を向けるとディアボロが隣のソファアにいた。

知り合いなのか、女の悪魔と一緒にだった。

「ああ。今日は伊吹とカジノを楽しもうと思ってな」

「そうか。何を楽しんできたんだい？」

「とりあえずスロットをやって来たんだけど、ポーカーはルールが難しくてまだよく分からない」

伊吹の言葉にディアボロは豪快に笑うと、運ばれてきたデモナスを一口飲んだ。

「あれはなかなか難しいからね。正直私もポーカーよりルーレットやスロットの方が分かりやすいよ」

「ディアボロもそうなんだ。良かったー私だけじゃなかったのちよっと安心した」

「そうかい？」

VIP ルームの中にディアボロの豪快な笑い声が再び響いた。

「それにしてもディアボロ、今日はバルバトスと一緒にじゃないのか？」

「ああ。今日はこちらのご婦人とデートの約束をしているから外で待っているんだ。」

「応答しむようにと声はかけて来たから、もしかしたらワンゲームくらいはしているかもな」

「へー。じゃあもし見かけたら声かけてみよ」

「そうしてくれ。バルバトスも伊吹に会ったらきつと喜ぶと思うよ。にしても今日も伊吹の足はきれいだね」

「ディアボロ！」

伊吹はあぐらになってディアボロと話をしていたが、ミニスカートのドレスだったせいで足が丸出しになっていたのだ。

「失礼。でも女性の美しところを褒めるのは男として悪い事じゃないだろう？」

「・・・それはそうだが・・・！」

ルシファアは少し悔しそうな顔でディアボロを見ていたが、グイッとデモナスを一口で飲み切るとため息をついた。

「そちらはそちらで楽しむつもりがあつてここに来たんだろう？」

「もちろん。このVIP ルームは自由な場だからね」

「なら、こちらの楽しみをあまり邪魔しないで欲しい。それにこいつは俺のものだ」

「分かっているよ。邪魔するつもりはない」

ルシファアの勝ち誇ったような顔を見てディアボロはほんの少し哀し気に微笑むと、連れの女悪魔の唇に軽くキスをした。

「それで良い」

ルシファアは伊吹の体をぐっと抱き寄せると、デモナスをグラスに注いでゆっくりと飲み始めた。

伊吹の目にはそんなルシファアの様子がなんとなく普段の紳士的な様子とは違うような気がした。

「ねえルシファア、こっちはこっちで楽しむ。ってどういう事？」

「・・・ああ、お前はまだ知らないんだな」

ルシファアはグラスをテーブルの上に置くと、伊吹のあごを片手でクイツと持ち上げ唇に自分の唇を強く押し付けた。

「ん!？」

強く押し付けられたルシファアの唇からは舌が現れる。

伊吹は唇の隙間にルシファアの舌先が触れると、ごく当たり前のように歯の間に隙間を作りルシファアの舌を受け入れた。ルシファアの舌先が伊吹の口の中に入ると、伊吹の舌先は自然と持ち上がりルシファアの舌先を求めて数秒間宙を泳ぐが、ルシファアの舌先は素早く伊吹を見つめ舌先同士を絡め合わせた。

「ん・・・」

互いの舌と舌が絡みあい、伊吹の口の中には先程までルシファアが味わっていたデモナスの味が唾液に混じって広がってくる。伊吹は手探りでルシファアの肩に手を置くといつかにルシファアが教えたように舌に吸い付こうとした。

しかしルシファアは伊吹がこれからやろうとしている事を知っていたかのように舌を抜き取ると伊吹の唇と自分の唇を離した。

「あん・・・」

一瞬唾液がお互いの唇の間を繋ぎ、ぶつりと切れる。

残念そうな伊吹のつぶやきがルシファアの耳には美味しそうなお菓子を手に入れ損ねた子供のように聞こえた。